

討論

小池 労働過程を基本行程と派生的行程と、どうわけ
るのか。

似田貝 単位労働過程で考えると、労働過程の三要素はいうまでもなく労働力と労働手段と労働対象だが、たとえば田植などの場合にはタネへの労働主体の働きかけがまず存在する。その場合労働手段としての土地を媒介として行われる。山田(舜)の規定では、タネから作物をつくる場合、直接に労働対象に働きかける労働過程と、タネ(労働対象)への労働主体の働きかけが耕地を媒介として行われる場合と、直接的な過程と付加的な労働過程とがあるがこれを派生的行程とよぶ。基本的行程は土地と考えるが、派生的行程のうち最も重要な労働手段は耕地であるが、耕地は収穫後は労働手段 \parallel 耕地としての性格を失い単なる土地となる。この単なる土地となったものを労働対象として、労働手段としての耕地に再生産する。これを基本的行程とよんでいる。

河村 それと関連して。労働過程と生産過程を分けるのかどうか。マルクスの場合、労働過程は使用価値と有用労働とか、かなり一般的契機においてとらえられるのに対し、価値ないし交換価値は特殊資本主義的生産過程で問題とされる。その意味で労働過程と生産過程は区別されていたが、こうした基本概念の説明をうかがいたい。また、イエというのは共同体と考えられるのか。「資本論」のなかでは直接に社会化された共同労働をとっているもの、園でも家でも村落でもかなり広く共同体として考えている。ハウスゲマインジャフトなど……。抽象度を高くしていえば所有と生産関係、生産過程と労働などどう考えるか。

小池 それと関連して、基礎範疇を設定する場合、共同体の出発

点は経営だと言われ、資本主義社会では商品範疇が基礎範疇だとし、そこには資本主義的経営をおいているといわれる。そのいみでは経営一般ではないのだからと思う。生産過程と労働過程をどうからませるかの問題とも関連するような、問題意識あるいは問題のたてかたがあるのではないか。経営はある特定の歴史的社会的関係を背後において経営だから経営一般ではないだろう。また「勤勞主体」——これをベトリブというがマルクスのいう勤勞主体とはどういふいみでいわれるのか。それも含めて展開して載きたい。

似田貝 ハウス・ゲメインシヤフトというか、家も国も共同体として存在し得るが、具体的にここで問題にしているのは村落共同体で、その論理構成を問題にしているわけです。共同体とそれを構成している成員がある。その成員、ハウスゲメインシヤフトと共同体をどう論理的に展開するか。ウエーバーの場合でもいろいろないみの共同体が登場するが、ここでは村落共同体の存在とそれを構成する成員の諸関係と共同体との関連を問題にする場合、共同体とハウスゲメインシヤフトを区別している。マルクスはフォルメンのなかでハウスゲメインシヤフトの中の労働と、注意深くしばしば共同体の労働の語を用いているが、共同体的再生産における労働の特質を叙述しているところで、ハウスゲメインシヤフト内の労働と、ハウスゲメインシヤフトの連合としての共同関係がある種の共同体的所有にもとづく共同労働とを区別しているのではなからうか。

河村 成員としての経営から共同体へという場合の経営をも共同体とよぶのか。共同体の規定にもかかわってくるのだが。フォルメンのなかの私的所有も必ずしも個人的所有ということではないだろうが。

似田貝 共同体的所有に對比される場合の所有だから、私的所有といってもイコール直接ブルジョアの所有ではない。日本の場合では私的所有あるいは占取ブルジョアのな或いはバルツエレンアイグントウムとして成立するかしないかに関ってくる。これが共同体の解体という場合一番重要な問題だと思ふ。

河村 \wedge 経営 \vee という基礎範疇をどう規定するかの問題については。

似田貝 私、一寸誤った表現をしまして。資本主義における物象化↓商品関係を基礎範疇としつつ、これと資本家的経営を一しよにおいたのが間違いで、これは出すべきではなかった。ここで言う経営はそういうものでなく、当然歴史的規定性をうけるが、共同体における分業関係との関連で出てくる。共同体成立のためには共同体的土地所有があるが、その構造をどこから分析してゆくか。そこに経営が措定されるわけで、現実には経営もゲメインシヤフト、ハウスゲメインシヤフトなのだが、これをそのみで問題にする場合と、共同体内部のそれとして問題にするのでは違うのではないか。共同体内のハウスゲメインシヤフトの相互関係を問題とするとき、ハウスゲメインシヤフトが共同体にどうかかわるのかをここでは問題にしている。

川本 ここで経営といわれているのは経営学という経営と異なる概念ではないのか。

似田貝 たとえば吉岡昭彦がイギリス地主制・封建制の構造分析のなかで経営という概念を使用している。

渡辺 経営学の経営と同様に考えていいのだと思う。言われることは経営学で生産力視点はどうかと言われる場合に近いのではない

か。イエないし、その人間関係、ゲマインシャフトから、そこから出発して共同体へという理解の方向を言われていると思う。

川本 共同体の基礎範疇として経営がおかれるとすれば、共同体は近代以前の時代的歴史的限定をうけるのだから、経営の場合もそうなるのか。

小池 経営は共同体理解のアンフアングだと言われるが、経営からどのように共同体へ上向してゆくのか。商品の場合はまさに資本制社会の基礎範疇であったのだが。

似田貝 経営というのもあまり良い表現で無いかもしれぬが、人間と人間との関係が資本制社会では商品を基礎範疇として理解される。経営はそのような共同体の構造分析の論理的起点、出発点と考える。

渡辺 共同体の構造分析、あるいは日本のムラの構造分析というとき、どういふものを分析対象とするのか。

似田貝 たとえば一定の段階をとれば、経営は歴史的に一定の規定をうけて、家族労作経営として存在する。この家族労作経営相互のとり結ぶ社会関係が共同体的なものとしてあらわれてくる。このなかで共同体的土地所有と私的土地所有、生産過程と労働過程との関係、これら相互がどのように結ばれ、生産関係、社会関係がどう構成されるかのメカニズムをあきらかにすることだと思ふ。

河村 たとえば自給的農民の存在が圧倒的である場合、その小農民のとり結ぶ村落が共同体的とよばれ、これが小商品生産者化した場合には共同体的関係が残ると考へるのか。また或るとしたら、それを、共同体と経営という方法論からどのように問題にしてゆくのか。

似田貝 具体的に日本の場合を考えると、マルクスやレーニンが論理的に構成したものとの間に存在するギャップをどう見るかに問題がある。かりに過程が順調に進む場合、レーニンは共同組織、ゲマインツエーゼンといているが、小商品生産者のとり結ぶ関係としてゲマインツエーゼンを言っている。具体的にはいろいろな条件を考えねばならぬが、小商品生産者のとり結ぶ社会関係の場合、共同体は過渡的な意味では残るが解体にむかうだろう。バルツエレンアイгентウムが成立する場合、共同体が存在するかが一つの問題であり、また社会構成上の条件、工業部門が急速に発展している場合の小商品生産では、工業からの収奪のなかで小商品生産として発展しなければならぬ場合、半日共同体が出てくるなど、いろいろな問題がある。私が共同体についてここで言う場合は前述の如く封建的共同体を前提として立論しているのだが。

渡辺 小商品生産の場合でも共同労働の地域的範囲は重要ではないか。小商品生産と共同体とは違ったディメンションでの問題だと思ふ。土地所有は大塚が言うような意味で共同体の問題の眼目であるが、土地所有と人間との関係、また労働の理解など、古典にややかたよりすぎているのではないか。人間と土地を所有として従来とらえてきたが、それ以外に労働としてとらえることができるのではないか。土地への働きかけは種々であり、毎日のゴイニング・コンサーンとしての利用もあれば土地確保、保全もありこれらを総括しているのが所有である。このように見ると、従来一番欠けていたのは土地の維持管理、保全にかかわる問題への理解であり、共同体はそれをやってきている。ここに重要な問題があるのではないか。とくに日本の場合はそうではないか。生産関係という場合も、生産手

段の所有を媒介とした人間関係というのみでなく、その前に、土地利用、保全の関係がありそれも総括して考えるべきではないか。また変革主体論を言われたが主体変革論も必要ではないか。

似田貝 私の報告では主体変革論もふくめて考えている。

安原 共同体を共同体たらしめるような、勤労主体の相互関係を共同体的たらしめるような、そのような勤労主体の特定のありかたを経営と言っているように思うが、とするとその経営には特定の歴史の実体がふくまれていると思う。そして所有を媒介とした生産活動から生じる諸関係を問題とされたが、そのうえで、いわゆる生活上の諸関係があるのではないか。ムラを共同体と異なると言われたが、経営相互の集团的な社会関係として共同体を考え、ムラはかかる生産の共同プラス生活の共同であるとすると、共同体がなくなってもムラは残ると考えるのか。そうすると生活上の諸関係のありかたをムラとよんでいるのか。特定の基本経営相互の関係をムラというとする、その経営が消滅した後の農家集団の相互関係はやはりムラというのか、コミュニティというのか、

近隣集団というようになるのか。人民公社などの如きもムラというのか。

似田貝 問題の難しさから今日の報告ではあえてA生活Vの問題をおとしている。とりあえずまずA生産Vに限定して問題を考えている。実際には生産行為が日常化してしまった場合も生産と生活を分析的に区別することはできるだろう。その前提に立って、共同体そのものから問題をたてる場合、原生的集团的なものが共同体の外枠として存在している。これがどうからんでくるかの問題だが、この点、大塚のいう共同体の推転と、共同体の外枠としての原生的関

係との連関については疑問を感じる。生活という場合、共同体のなかに生活関係が無いのではないが、そのとりあつかいは難しい。しかし一応生産という側面から問題をとりあげてゆくとムラは共同体と等置でなくて、その外延に何らかの生活関係(慣習もふくめて)があるのではないかと考える。実体としてはムラと共同体が等置であり得る場合もあるだろうが、ここでは家連合の場合のムラを問題にする場合と、生産を基礎とした共同体との間には論理的に差があるということである。

安原 ムラのポジティブな規定をどう考えるのか。いまムラが解体したとかしないと言われる。農業センサスでは農業集落に一定の規定を与えているがその農業集落がムラなのか。むしろその中に共同体的な諸関係があったり、又それは外延的に一定の範囲やひろがりがある。しかしその内部の結合原理は歴史的に変化する。こう考えるとムラの解体という論議はおかしくなるので、共同体的関係は解体したがムラは存在し続けるということになる。そのように理解するということなのか。

吉沢 それと関連して福武の言う地域社会的拘束にふれられたがそれとムラとの関係はどういうことか。

似田貝 ムラは一応部落のようなものを前提として言われているのだと思うが……。

河村 農業センサスでは属地的なとらえ方を経験的とらえ方として採用しているがこの点を理論的に深めるとどういうことになるか。

渡辺 センサス設計の帳本人の一人ですがこれはこうした議論とは無縁なところでやってきているのでこれからそこに近づいてゆきたいということ……で、共同労働の地域的範囲と同じことで、ムラ

とムラの間には社会集団のさかいがあり、地域的なさかいはある。これは応用問題に属することで、ムラの解体ということもいわれているが、応用問題で実践に應用するとすれば、解体するものなら大いに解体しようじゃないかと考えるのだが、そのあげくの果がどうなるのか。地域的な境界をとりはらえるものが問題だ。共同体はいかなる条件によって非共同体になるのか。こうした問題がある。農学者のつくるコミュニティに地理的な境界が永久に必要なものなのか。北支にいたころ、この点あまりはつきりしなかった。インドについて聞いてみてもそうで、土地所有制度・形態というものと、個々の具体的な村落共同体との関連はあまり理論的に問題にされてこなかったのではなからうか。

また、報告の冒頭に経済学的接近と社会学の接近ということを書かれたが、経済学的接近とは生産から消費までのフィジカルなアプローチで社会学は人間の行動を問題とするのだから。労働過程はそのなかに入ってくる。そこで人間と土地を結びつけるようないまい組み立てを考えてみないと、社会関係といわゆる生産関係との両者はいつまでも並行線をたどるようで、これを結びつけて理解する問題設定をしてもいいのではなからうか。現実には日本の農業者の困っている問題はそこが多いうだ。実践の問題を背負ったときに学問的蓄積の応用のきかないところがある。農村に人が住み、その構成している社会集団がムラなので、センサスでの規定で調査上の約束ごととして、今回土地の境界をとりあげた。早く言えば調査の技術論から来たものだ。

柿崎 鈴木の自然村の概念は内容と外枠という二つの次元から立てられて、内容として社会的文化的自給性の問題が考えられていて、

それは時代により変わるだろう。特に自給性、自足性の問題はムラを考える場合重要だと思うが、村落共同体の生産諸関係がムラをムラたらしめるコア（核）となっていて、それを基盤として社会的、文化的自給自足性の及ぶ範囲、それを内容として形成される一つの形態、外枠としてムラが考えられる。それはフィジカルには村ざかいととしてとらえられるものであろうが、村ざかとも内容によって伸縮性をもつもので、近世の村方騒動によって動かされる面もあるのだ、境界や外枠も内容の変化、共同体的諸関係の変化によって外枠も変形してくる。そして近代村落の場合、村落の中心部分が空洞化といわれるような形になるのではないか。ムラと共同体という場合、両者はイコールではないだろう。鈴木ではムラの規範の及ぶ範囲、祭祀行事の及ぶ範囲が問題とされているが、土地と結びついた生産関係なしにはムラはなくなってしまう。

安原 前回の研究会で報告者（室谷）がセンサスの予備調査を紹介したが、その際、三つの契機をとりあげていた。第一は村ざかい、第二は村仕事、第三は部落費で、このうち最も多かったのは村仕事であったという。つまり村の範囲として共同労働によって画される面が強いということだろう。しかし、今日では雇農家相互のヘルパ―関係のように部落をこえた共同関係も生じている。このへんの問題をどう理解すべきか。

渡辺 報告者は労働の基本的行程と派生の行程を区別したが、大半のユイは派生の行程に属するのではないか。それに対し隣さらいや道普請などの村仕事は基本的行程に属するだろう。労働対象としての土地を労働手段に再生産するのだから。したがって村仕事における共同は基本的労働過程としての共同であり、その地域的範囲が

ムラである。この範囲が意味をもたなくなればムラもなくなるということになる。しかし現象的には種々問題があり、過疎によって住む人間がいなくなった場合、ムラがなくなつたとして法的に処理してよいのか、問題がある。ムラが動く場合、現在三つの形がある。一つは市街地化、第二は人がいなくなる。第三は農業の変化で、これらの動きをいわばハミリでとらえる（従来のムラのとらえ方がステイール写真のなとらえかたであったのに対し）必要がある。そのため枠組みとして土地の境界を考えてみた。

川本 ムラの地域的範囲は調査技術と関連してとりあげられたものだが、しかし実際はそれが社会的範囲と重なっている。ムラびとと非ムラびとの区別も調査で明らかにしたかったが、これは調査上困難なので、便宜的に部落費（万雑）をとりあげてみた。しかしこれも取扱いが難しいので調査では落した。

ムラ・イコール共同体か否かの問題については柿崎は空洞化といったが、たしかに両者の間にはズレがあり、バラバラになる。しかし地域的な枠はあるだろうし、それが、ゲマインヴェーゼンとして共同体を基礎づけるものとも考えられるのではないか。共同体を共同体たらしめるものとして水利や農道の規制が指摘されるが、ムラと共同体のズレという点ではたとえば水利組合の範囲なども問題であろう。

渡辺 村ざかいの問題については、これを定着農耕社会の出現過程で発生史的にみるとムラの勢力範囲ではないか。四圍の山村などの例からもそう考えられる。この境界をどう動かすが大きな問題で、構造改善事業もこの関係で返上される事例も生じた。この境界内の土地を全体として維持、管理するところに共同体的土地所有の問

題があるのではないか。所有について、こうした哲学的アプローチというか、いわば原点に立ちかえって、利用や維持管理、保全と人間との関係、それを土台とした社会関係があらためて問題とさるべきように思う。

（なお論すべき点が多くありましたが会場の時間の都合でこれで討論を終りました。渡辺兵力氏の研究会御出席は始めてでしたが、この日、村研に会員として加入されました。）